

「コルチゾール・アボット」についての基礎的検討

◎堀内 駿矢¹⁾、入汐 弘美¹⁾、田路 夕海¹⁾、春名 希依子¹⁾、佐藤 絵里香¹⁾、松村 郁子¹⁾、大窪 元子¹⁾、小倉 眞紀¹⁾
 地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター¹⁾

●はじめに

コルチゾールは副腎皮質の束状帯で合成される糖質コルチコイドであり、ACTHにより分泌が調整されている。糖質コルチコイドの活性を推定するとともに、視床下部—下垂体—副腎系の病変を推定することができる。今回コルチゾールキット「コルチゾール・アボット」について、その基礎性能を評価する機会を得たので以下に報告する。

●試薬・測定機器・測定原理

○コルチゾールアボット（アボットジャパン株式会社）・ARCHTECT アナライザー i2000SR（アボットジャパン株式会社）・化学発光免疫測定法（CLIA 法）：以下本方法
 ○アクセスコルチゾール試薬（ベックマン・コールター株式会社）・Access2（ベックマン・コールター株式会社）・化学発光酵素免疫測定法（CLEIA 法）：以下従来法

●検討方法・結果

○同時再現性：コントロール3濃度（L、M、H）を20回連続測定した結果、CV%はL；2.9%、M；1.7%、H；2.1%であった。

○日差再現性：コントロール3濃度（L、M、H）を20日間測定した結果、CV%はL；3.8%、M；2.4%、H；1.9%であった。

○希釈直線性：コントロールM、Hを10段階希釈し測定した結果、良好な希釈直線性を確認した。

○従来法との相関：従来法との相関性は、全検体で、 $y=0.7439x+0.12392$, $r=0.999$ (n=62)、希釈検体を除くと $y=0.8145x+0.1634$, $r=0.963$ (n=56) であった。

ACTH 負荷症例：負荷前の右副腎は従来法 12.5μg/dL に対し本方法 10.4μg/dL、左副腎 103, 99.6、IVC 下流 7.6, 6.5、IVC 上流 7.3, 6.5、負荷後左副腎は 810, 605 であった。

●まとめ

同時再現性、日差再現性、希釈直線性ともに良好な結果を示した。従来法との相関においては相関係数は0.963と良好であるが、従来法に比べ約20～25%の低値を示した。ACTH 負荷検体においては従来法に比べ3.3～25.3%低値であった。

大阪急性期・総合医療センター 06-6692-1201(内線 5242)